

諸沢 巖先生に心からの感謝を込めて



諸沢巖先生はかつて本学に助手採用試験があったころ、試験に応募し、優秀な成績で採用された。ご出身は東京教育大学大学院で、ご承知のように現在の筑波大学の前身校である。それ以来、文学部のドイツ文学科の助手時代を過ごされ、当時、故上道直夫先生が阪神ドイツ文学会会長をされていたので、それを支える地道なお仕事を一手に引き受けられた。その堅実な仕事振りによって、かつての同僚の先生方の信頼を得るとともに、専任講師昇進以来、熱心な学生指導でも定評があった。なお文学部時代に、フンボルト給費留学生に採用され、ドイツのシュトゥットガルト大学のR・デール教授のもとでも研鑽を積まれた。

やがて文学部を経て、組織改変の折に外国語教育研究機構教授として移籍されたが、合計40有余年にわたり、ドイツ語、ドイツ文学教育、研究一筋に専念されてきた。とりわけ諸沢先生は、教育面において正確にドイツ語を読み、理解できるよう行き届いた指導をおこなってこられた。一見穏やかな風貌でやさしい先生のようなのであるが、学生に対してはきびしく鍛えることをモットーにされていた。諸沢先生の担当されたクラスを翌年受け持つと、その教育の成果をはっきりと感じ取ることができた。また文学部時代には、ドイツ語教科書の作成にも加わり、持論の教授法をテキスト編集に盛り込まれた。

昨今ではコミュニケーション授業が重要視され、たしかにそれが学生のニーズでもあるので、ドイツ語教育の主流となっている。それとあわせて、読解力を養成していくこともドイツ語教育のもうひとつの柱であるということは、多くの人びとが認めるところである。両者のバランスのとれた教育が望ましい今後のあり方であるといえよう。その意味で、諸沢先生は文学部および外国語教育研究機構を通じて、外国語教育において重要な役割をはたしてきた。このような長年にわたる本学へのご尽力に対し、まずはここからお礼を申し上げたいと思う。

諸沢先生の研究対象は19世紀の文学者ラーベであるが、この作家研究は諸沢先生のお人柄からも、首肯できるものである。たしかにドイツ文学史では、ラーベはそれほど目立つ作家ではないが、いぶし銀のように味のある人で、読み込めば読み込むほど魅了される作品が多い。先生はわき目も振らずに、コツコツとこれらの作品に打ち込んでこられた。研究成果を多産する

タイプではなかったが、ご自分で納得できた論文を堅実に発表されてこられた。また19世紀ドイツ文学研究会にも参加され、学外の研究者とも交流を深めておられた。

諸沢先生の業績として特筆すべきは、1999年に共著として出版した『遠来の客』（関西大学出版部）である。これはドイツのシュトゥットガルト大学のデール教授を招聘し、本学で俳句や連句の会を開いたときの記録であるが、英文学、国文学の先生方も交え、国際色豊かな会であったとうかがっている。このユニークな試みは、世にも認められ、英国ハイク協会「ササカワ賞次席」を受賞された。また最近は、比較文化研究の観点からドイツ文学、国文学、法学、医学というそれぞれの領域の専門家とともに異文化衝突と受容の諸相に関する共同研究を行われ、その成果を『医学と文学と法律学の間—森鷗外のドイツ留学と明治期における異文化の受容—』（遊文舎）という大変興味深い編著書にまとめられている。さらに諸沢先生は人望によって、関西大学独逸文学会の会長に推され、学会運営や後進の指導に尽力されたことも、ここで述べておかなければならない。

さて趣味としては囲碁とワイン、山歩きということをおうかがいしている。囲碁には同席したことはないが、かつて同好の先生方とお手合わせを楽しみにしていた話を聞いたことがある。ご本人は謙遜されているが、腕前は相当なものであるという。

しかし囲碁のみならず、とくにワインのたしなみも年季が入っており、神戸のワイン輸入業者の店にも顔を出し、気に入ったものが入手できると、雑談のうちにうれしそうに披露される。何かの会合やコンパのさいには、そっと何気なくお気に入りのボトルを差し出され、同僚がおいしそうに飲む姿を見ることをよろこびとされていた。わたし自身は残念ながらアルコールを飲めないが、同僚の先生方は何度か諸沢先生のご厚情に、つい甘えてご相伴にあずかってこられ、ワインを通じてのドイツ文化の広がりを愉しんでこられた。

諸沢先生は人との付き合いを大切にされ、どんなに大変なときにも、いやなときでも苦情や文句をいうのを聞いたことがない。いつも相手を思いやるという気遣いをされ、わたしたちもそれにずいぶん助けられた。特に、文学部から外国語教育研究機構へ、教養教育課程のドイツ語教育の管轄が移される時、適宜、非常勤講師の方々に新しい方針を丁寧に説明され、一層のご協力が得られるよう、様々な形でご尽力くださった。

このように誠実なお人柄が本学を去られるのは、名残惜しく寂しいが、これも生まれた年の順番によってやむをえないことである。今後、健康に留意され、末永く、日独間の交流をさまざまな形で深められるとともに、長年のご経験を活かして、さらに変革が続くであろう外国語教育機構の発展を見守っていただきたいと思う。

杉谷 眞佐子